



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	天野, 哲也; 星野, 祐子
Citation	
Issue Date	2009-11
DOI	
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49246
Right	
Type	book
Additional Information	
File Information	MuseumNews_20.pdf



Instructions for use



THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学 総合博物館ニュース

展示物が動かないなら入館者に動いてもらったら？

旭山動物園は年間来園者数が300万人を超えるそうです。まさに桁違いのこの数はマスコミが大騒ぎしたためとはいえるものの、旭山動物園を見習って入館者数増加に努力しろとハッパをかけられている博物館も多いことでしょう。このような理不尽な要求は動物園と博物館は「同じ」だとする考えに基づいています。しかし、動物園と博物館は根本的に異なる施設です。相違点として、「現在か未来か」、「動くか動かないか」、の二つが思い当たります。

まず「現在か未来か」を考えてみましょう。動物園の目的は今生きている動物を現在生きている人々に見てもらうことです。すなわち、動物園は現在の人々のための施設です。一方、博物館の目的は未来の人々に文化を伝えるために標本を残すことです。過去の文化資料を保存することで現在を未来につなげようという高尚な目的を持った施設が博物館です。そのことを理解してもらうために現在の人々に展示という形でそれらの標本を見させているのです。つまり、動物園は現在のための施設であるのに対して博物館は未来のための施設なのです。しかし、人間には未来が見えません。病気が怪我をして働けなくなるかもしれない未来が見えないから保険に入るのを渋ります。エネルギー危機に陥って電灯も暖房もない生活を送るかもしれない未来の人々が見えないから化石燃料を使い果たします。大雨が降って土砂崩れが起こるかもしれない未来が見えないから土地を掘

り返します。森を枯らし、水を汚し、宵越しの銭を持たなくても平気なもの、未来が見えないからです。未来の人々に標本を残すという博物館の目的は未来の見えない人間には理解されにくいのです。

次に「動くか動かないか」を考えます。動物園は今現在生きていて「動く」動物たちを来園者に見せますが、博物館がお見せするのは現在生きていない「動かない」標本です。このことは入館者に大きな影響を与えます。映画館の入場者と写真展の入場者はどちらが多いでしょうか？ テレビが映像ではなく画像を映し出す装置だとしたら、これほど普及したでしょうか？人間の生きている世界は「動いて」います。雨が降り、雲は流れ、風に草木がなびき、鳥やハチやチョウが飛び回り、自動車は走り、人々は歩き回ります。人間は「動く」モノに大きな興味を持ち、「動かない」モノにはあまり関心を払いません。生きていて「動く」動物たちを見せる動物園の入園者が、「動かない」標本を見せる博物館の入館者より一桁、あるいは二桁も多いのは以上述べた人間の性癖に原因があります。この点では博物館はいかに努力しても動物園にかないません。

では、旭山動物園の大活躍を博物館は黙って見ていれば良いかというと、そうではありません。旭山動物園が動物園の新しい可能性を発掘したとすれば、博物館にも発掘すべき新しい可能性があるかもしれません。

動く動物を人間が見る、という動物園の構造を逆転したらどうだろう？展示するモノが動かないのなら人間に「動いて」もらったらどうか？このような逆転の発想から生まれたのが、8月1日(土)から9月27日(日)まで開催された北大総合博物館10周年記念展示「生物多様な部屋—北大の分類学の系譜」でした。この企画展の入室者には、暗い部屋の中で懐中電灯を片手に歩き回っていただき、多数の展示標本の中から面白いモノを自ら見つけ出してじっくり見ていただきました。

博物館展示の新しい可能性を探るこの実験的な試みの客観的な評価は期間中に実施したアンケートの結果分析を待ちたいと思います。

馬渡駿介
(館長／動物分類学)

目次

- ページ 1 : ● 展示物が動かないなら入館者に動いてもらったら？
- ページ 2 : ● 第64回、65回企画展示
- ページ 3 : ● 開館10周年記念行事:サテライト展示
- ページ 6 : ● 正田豊治ガラス乾板写真展
- サステナビリティ・ウィーク2009 関連実験展示
- ページ 7 : ● グローバルCOE (GCOE) 展示
- ページ 8 : ● 外国人招へい研究者の紹介
- アイランド・アークのリニューアル
- HoUM「宇宙の4Dシアター」の活動
- ページ 9 : ● HoUMオリジナルTシャツデザインプロジェクト
- ページ 10 : ● Be Scientists!! ～科学者になってみよう～
- 道新ぶんぶんクラブとの共催講座を開催
- 2009年度第1回ボランティア講座&交流会
- ページ 11 : ● 4Dシアターボランティアグループで助成金獲得
- カルチャーナイト2009報告
- ページ 12 : ● チェンバロアカデミーの活動
- <寄稿>特任教員 (Witteveen氏)
- ページ 14 : ● セミナー
- バラタクノミスト養成講座 ● 主な出来事
- ページ 16 : ● 入館者数 ● お知らせ
- お詫びと訂正 ● お礼

Nov. 2009
ISSUE 20

第64回企画展示

「支笏火山と私たちの暮らし」「地質の日」記念展示

去る4月28日～5月31日に、北海道大学総合博物館1階「知の統合」コーナーにおいて標記企画展示が開催されました。

本展示は昨年の企画展示「ライマンと北海道の地質―北からの日本地質学の夜明け―」展に引き続く、5月10日の「地質の日」を記念するもので、日本地質学会北海道支部・日本応用地質学会北海道支部・北海道地質調査業協会・札幌建築鑑賞会・札幌軟石文化を語る会・北海道大学総合博物館の共催で行われました。



会場の様子



会場の様子

支笏湖を作った約4万年前の支笏火山噴火は我が国でも最大級の巨大火山爆発でした。展示では、道央部の地形形成や植生に大きな影響を及ぼした支笏カルデラ噴火と後カルデラ火山活動の様子、火山噴出物である火砕流堆積物や降下火砕堆積物（火山灰）の分布と特徴、支笏湖周辺の温泉や金鉱床などの地質学に関わる事柄とともに、明治・大正期の札幌で建築石材として使われた札幌軟石（火砕流堆積物の一部）のかつての採掘の様子などをパネル・実物展示・DVD映像などにより紹介

しました。展示をとおして、火山活動の災害と恵みの両面を市民の皆さんに知っていただくとともに、火山災害の防災・

減災への意識や備えの重要性も市民にアピールしました。



講演会の様子

関連の土曜市民セミナー（5月16日）では、若松幹男氏（北海道地質調査業協会）と瀬戸静恵氏（財団法人自然公園財団支笏湖支部）による講演会「支笏火山と支笏湖もやまばなし」が行われ、多くの市民に参加していただきました。

在田一則

（資料部研究員／地質学）

北海道大学総合博物館開館10周年を記念する 第65回企画展示 「生物多様な部屋―北大の分類学の系譜」の終了報告

北海道大学総合博物館が開館10周年を迎えたことを記念する催しの一つとして、企画展示「生物多様な部屋―北大の分類学の系譜」が8月1日（土）から9月27日（日）まで総合博物館3階企画展示室において開催されました。

開幕前日の7月31日（金）の朝10時より行われたオープニングセレモニーでは、佐伯浩総長代理の岡田尚武副学長のご挨拶、3階の企画展示室前でのテープカット、そして



展示室の様子

内覧会が催されました。当日の様子は北海道放送HBCテレビの夕方のニュース番組で6時半頃放映されました。

本企画展示の目的は北大の分類学研究者の研究史を紹介することです。狭い部屋の中に、戦前に制作されたレトロなガラス標本棚を、大人2人がやっとすれ違えるほどの間隔を置いて配置し、棚の中には総合博物館のバックヤードに所蔵されている多様な生物標本を大量に並べ、それらの生物群を研究した研究者を紹介する小さな文章パネルと写真を添えました。さらに、貴重な標本の劣化を防ぐために照明を暗くしました。入室者は、受付のボランティア・学生から懐中電灯を受け取り、標本を照らして鑑賞する



展示室の様子

という趣向です。展示室内には大学院生の展示解説員を配置し、入室者の質問に答えると同時に暗所での事故を未然に防ごうと万全の体制を整えました。このように、本企画展示はこれまでとは少々異なる実験展示です。その趣旨は巻頭言で述べたとおりです。



さて、開幕初日の8月1日（土）13:00からは、本企画展示の関連行事として、「北大の分類学の系譜」と題する講演会が総合博物館1階「知の統合コーナー」で開催されました。演題と講演者は以下の通りです。「札幌農学校～北大における植物分類学研究の系譜」（総合博物館教授・高橋英樹）、「北海道大学における昆虫学の系譜」（総合博物館准教授・大原昌宏）、「北大の魚類分類学の系譜」（総合博物館助教・河合俊郎）、「北大古生物研究の系譜」（北大名誉教授総合博物館資料部研究員・加藤誠）、「北大における藻類分類学の系譜」（北大名誉教授総合博物館資料部研究員・増田道夫）、「理学部にお

ける無脊椎動物の分類学の系譜」(総合博物館館長・馬渡駿介)。

本企画展示は、副題の「―北大の分類学の系譜―」が示すように、札幌農学校の開校1876年(明治9年)以来、現在まで130年以上にわたって行われてきた分類学の成果を、歴代の研究者が研究に使った様々な標本を展示し、研究者の系譜をたどることで明らかにすることに加えて、この系譜は現在も若者たちに引き継がれ、大学院生たちによって多様な生物群に関する分類学の研究が現在進行形で行われていることを示そうと意図されたものです。従って、大学院生たちの研究も展示しました。さらに、現役大学院生たちによる講演会「分類学の伝統を継承する若者たち」が8月28日(金)に開催されました。自分たちの研究を一般の方々に易しく説明し、なぜ自分が分類学という学問にハマったか、分類学はどこが面白くて、どのような成果が得られ、それはどんな意義があるのかを語ってもらおうというわけです。



当日の講演者は理学院と水産科学院の博士前期・後期課程大学院生総勢7人、講演内容は、単細胞の藻類から無脊椎動物、魚類、そして恐竜トリケラトプスに至るまで多岐にわたり、講演スタイルも一般向けから、かなり専門的な講演まで多様でした。講演終了後の総括質疑応答はかなり盛り上がりしました。聴衆が専門家である学会と異なり、今回の講演会は一般の方々に前にしたもので、たいへん勝手が違ったようです。予期せぬ質問が相次ぎ、大学院生たちは回答に四苦八苦していました。

大学が一般社会から乖離しないためにも、大学で行っている研究を一般の方々に理解



講演の様子

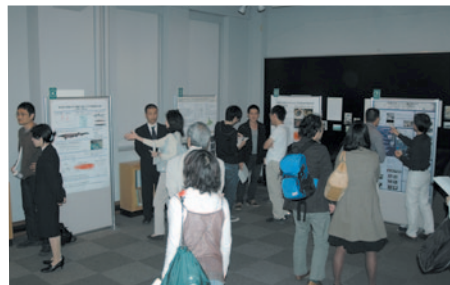
していただかねばなりません。そのためには自分の専門の研究を社会の中に位置づけ、人々が理解できるように加工して説明する必要があります。自分の研究は一般社会にとってどんな意味があるのか、何の役に立つのか、あるいは立たないのか……。自分の専門が基礎研究であるなら、現在直接役に立たないそのような研究を社会にどう説明するか。その意義をいかに理解してもらうか……。講演会「分類学の伝統を継承する若者たち」は、参加された一般の方々にとって新しい知識を得られた場でありましたし、講演した大学院生たちにとっても、研究と社会の関係を考える場としてきわめて意義深いものであったのではないのでしょうか。

閉幕を間近に控えた9月25日(金)には北大生たちの分類学に関する研究発表ポスターの展示会がスタートしました。8人の学生・大学院生が一般の方々に理解していただくことを目指して作成したポスターが総合博物館1階の「知の統合」コーナーに最終日の27日(日)まで3日間展示されました。最終日には「北大カフェプロジェクト」を推進している学生たちが「知の交流」コーナーにカフェを開き、来館者はコーヒーを飲みながら、オリジナリティ、クオリティ、インパクト、

デザイン、そしてわかりやすさ、の5項目でポスターを採点しました。採点結果はその場で集計され、「ベストポスター賞」が選ばれ、「生物多様な部屋―北大の分類学の系譜」は無事閉幕しました。



本企画展示は一般的な博物館展示の逆を行くことで展示の可能性を探る実験的な試みでした。このような展示を行えるのも、入場料をいただかない大学博物館だからこそです。従来とは一風変わっていたため、とまどった来館者も多く、賛否は分かれたというのがおおかたの感想ですが、客観的な評価は期間中に実施したアンケートの結果分析を待ちたいと思います。



ポスター展示



カフェ

馬渡駿介
(館長／動物分類学)

北海道大学総合博物館 開館10周年記念行事 サテライト展示(2009年)

北海道大学総合博物館は本年をもって開館10周年を迎えました。10周年を記念し、2009年度は「サテライト展示」を行っています。これは、当博物館が保管する多様な分野の貴重な資料の一部を北海道大学キャンパスの外へ持ち出し、様々な場所で公開展示し、皆様に見ていただくという、これまでにない試みです。「サテライト展示」

は10月までに北海道内の13の施設で開催されました。今後も数ヶ所で開催されることが予定されています。皆様のそばに北海道大学総合博物館が出張します。サテライト展示をご覧いただき、北海道大学総合博物館は、北海道大学の誇る世界的に貴重な資料を保全、整備、研究、活用していることを知っていただければ幸いです。「サ

テライト展示」の開催には、道内各館・施設の多大なご協力をいただきました。ここに厚くお礼を申し上げます。今後も道内博物館のネットワークを大切にしながら、お互いの協力関係を築いていきたいと考えております。

馬渡駿介
(館長／動物分類学)
大原昌宏
(研究部准教授／昆虫学)



会場：かでの2.7, 札幌
会期：2009.8.3—8.13
(担当：大原・小林)



会場：旭川市博物館、旭川
会期：2009.7.11—9.23
(担当：大原)



会場：帯広百年記念館、帯広
会期：2009.8.6—9.15
(担当：大原)



会場：札幌市情報センター、札幌
会期：2009.8.18—9.26
(担当：松枝)



会場：中川町エコミュージアムセンター、中川
会期：2009.7.18—9.10
(担当：小林)



会場：旭川市科学館サイバル、旭川
会期：2009.7.11—9.23
(担当：大原)





会場：小樽市総合博物館、小樽
会期：2009.7.30－11.3
(担当：松枝)



会場：足寄動物化石博物館、足寄
会期：2009.7.18－9.10
(担当：小林)

会場：札幌市中央図書館、札幌
会期：2009.7.23－9.13
(担当：松枝)

会場：黒松内プナセンター、黒松内
会期：2009.10.12－11.8
(担当：松枝)



会場：三笠市立博物館、三笠
会期：2009.7.18－9.10
(担当：小林)



会場：支笏湖ビジターセンター、千歳
会期：2009.6.2－6.30
(担当：松枝)



会場：釧路市立博物館、釧路
会期：2009.9.19－11.3
(担当：大原・天野・河合)

「足田豊治ガラス乾板写真展」

北海道大学文学研究科芸術学講座と総合博物館は、2009年10月24日から11月23日まで、「足田豊治ガラス乾板写真 知られざる北海道写真—ある魚類学者のま



オヒョウと人間との比較

なざしー」展を開催しています。本学の函館キャンパス内にある水産科学館（総合博物館分館）には、足田豊治の撮影による約6,900点のガラス乾板が残されています。足田は、現在の北大水産学部で、明治末から昭和初期までの43年の間、教官を務めた人物で、シシャモの学名の命名者として、また北方産カレイ類の研究者として知られています。

この「足田写真」は「北海道開拓写真」とならぶ北大の所蔵する貴重な資料ですが、これまでほとんど紹介されてきませんでした。「足田写真」の約半数は、研究のために撮られたと考えられる魚類の写真です。しかしながらそれらには、形体の美しさや、表皮の質感のおもしろさなど、魚類研究にはかならずしも必要のない要素があえて強調されているように思われます。また魚類のポーズや配置の仕方には、撮影者の遊び心を見てとることができます。

他の半数は、北大のキャンパスや学生生活、あるいは調査旅行で訪れた択捉や色丹の風景などの写真です。現存しない建物や、かつての漁業の様子と人々の暮らし、また時局を反映した情景は、今日では歴史の重要な記録です。

今回の展覧会は「足田写真」のごく一部ですが、その多様な側面を紹介し、足田豊治の膨大な仕事を概観する試みです。

なお今回の企画は、北海道大学教育GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」の一環として本学の大学院生・学生19名が主体的にかかわっております。足田写真の調査を博士課程の研究課題とする廣田理紗さんを中心に、展覧会の構想、作品調査、パネル・キャプションの制作、カタログ編集、展示作業、広報活動、そして会期中のギャラリートーク、シンポジウムの開催など、準備全般と運営に院生・学生が参加しております。

湯浅万紀子

（研究部准教授／博物館教育学）

サステナビリティ・ウィーク2009 関連実験展示

“統合科学が解明する「洞爺湖・有珠火山地域の過去と未来」”

11月4日（水）から13日（金）まで、総合博物館1階「知の統合」コーナーで、“統合科学が解明する「洞爺湖・有珠火山地域の過去と未来」”と題する実験展示が行われます。これは北海道大学が洞爺湖サミットに関連して昨年行った「サステナビリティ・ウィーク」の本年度版、「北海道大学サステナビリティ・ウィーク2009」への参加行事です。

人類社会の持続可能性が問われている今日、果たして大学はこれからも持続して行けるのでしょうか？ 大学の持続は誰も保証してはくれません。大学は自らの持続可能性を自ら探らなければなりません。では、北海道大学が長く持続するためには何が必要でしょうか？「統合科学」がその答えの1つであると考えた有志は「統合科学コンソーシアム」を作りました。個別の研究をある方向で統合すると、新しい研究の切

り口、埋もれていた成果、思いがけない応用、将来の方向等々が見えてきます。北大が「研究者の寄せ集め場」であることを脱し、そのような「統合の場」として機能すれば、社会の持続を支える者としての北大の持続性が保証される、というのが「統合科学コンソーシアム」のコンセプトです。

本実験展示は、「北大統合科学」をパッケージとして展開するための最初の試みとして、「有珠洞爺湖地域の過去と未来」をテーマに、有珠山の噴火に関連して行われた様々な分野の研究、たとえば、火山学、地震学、地質学、生態学、分類学、植物学、考古学、社会学等々の研究成果を関連づけて展示します。

期間中にはポスター展を開催するほか、6日（金）から8日（日）には学生によるポスター、口頭発表、また8日（日）と13日（金）には公開シンポジウムが行われます。シンポ

ジウムでは、各分野の研究者に展示会場に集まっていただき、全関連分野の中から選んだ3～4分野の研究者の方々に講演していただきます。このシンポはもちろんオープンで行います。研究者に加えて市民や学生が、講演を肴にお酒ならぬコーヒーを飲みながらフリートークを行い、学問統合から何が見えてくるかを議論します。ポスター展は、大学院生や学生、あるいは高校生を交えて開催する予定です。それぞれの詳細は追ってお知らせいたします。総合博物館のホームページをチェックして下さい。

本展示に関連して、一般の方々に北大の「統合科学」を知っていただく、ビデオの作成が進んでいます。今回は「有珠洞爺湖地域の過去と未来」に関する内容になりますが、「統合科学」のテーマはその他いくつも考えられ、今後はそれらのテ

マを一つずつ選んで企画展や講演会を開催し、ビデオを作成して行く予定です。そのような催しが持続すれば、ビデオライブラリーが充実し、持続性が確立されるものと期待しています。

10月7日(水)の午後には、本番シンの準備のため、総合博物館「知の統合」コーナーでプレシンポが開催されました。10人ほどの関係者が集い、4つのプレ講演を聴いて議論を戦わせました。これで本番に

向けての準備OKです!

馬渡駿介
(館長/動物分類学)

グローバルCOE(GCOE)展示

総合博物館も関係する2009(平成21)年度グローバルCOEプログラム(学際、複合、新領域)「境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界」が採択されました。本プログラムは、代表者を岩下明裕教授(スラブ研究センター)として総合博物館を含む北大8部局21名の事業推進担当者から構成されており、文部科学省が推進する大型プロジェクトで本年度北大では唯一採択されたものです。

このプログラムでは、我が国では個別研究の集積に過ぎない境界研究(ボーダースタディズ)を、北海道という地の利を生かし、スラブ・ユーラシア地域を中心とした研究蓄積及び人文・社会系の広域・比較に関わ

る教育研究の知的インフラに糾合し、総合的な学問領域の拠点を立ち上げることを主な目的としています。さらには北海道大学を拠点として、全国の境界研究を集約すると共に国際的なネットワークを構築し、次世代研究者及び実務者の養成・教育を行うことを目指しています。国境問題といえど紛争をイメージしがちですが、そればかりでなく政治・経済・文化交流、民族移動その他多くの事象があることから、それらを総合的かつ多角的に捕らえて研究プロジェクトを進展させることにも本プログラムの特色があります。

このGCOEプログラムは、本学文学研究科とスラブ研が中心となり高評価を受けた21世紀COEプログラム「スラブ・ユーラシア学の構築」(2003～2007年度)の後継的、かつ発展的なプログラムです。プログラムの推進に当たってはコアメンバー(総合博物館松枝大治教授を含む)が中心となり、実態研究と表象研究の二つの側面から5か年に亘って事業を推進して行くことになります。

総合博物館は、本プログラムの趣旨や研究成果を総合博物館における展示を通して広く一般に公開するばかりでなく、プログラムの進捗状況を随時公表すると共に、総合博物館の場を活用して特に大学院生の教育研究を行う役割を担うことも期待されています。博物館における学

術的展示では、通常は様々な研究成果を展示公開することが常道です。しかし、本展示ではそれとは異なり3～6ヶ月単位で展示の切り替え(リニューアル)を行いながら、本プログラムに關係する多様な分野の研究の進捗状況を随時展示公開して行くなど、これまでとは展示手法が多少異なり、全プログラム期間を通しての発展的展示の展開を企画しています。そのため、総合博物館におけるGCOE関連スタッフとして、新たにプロジェクト(博士)研究員の木山克彦さんと技術補助員の宇佐見祥子さんの2名が配置されました。

関連展示は2階の専用展示コーナー(旧「科学技術展示」コーナー)で行われ、10月3日から「第1期展示」の一般公開が始まりました。展示コーナー入り口には展示シンボルとして、自転する直径約1m超(縮尺1,200万分の1)の陸上・海底両面に精密な地形起伏を掘り込んだ地球儀模型が設置され、来館者の注目を浴びています。また、総合博物館における展示の展開と関連して、毎月第1土曜日午後には土曜市民セミナー(道民カレッジと連携)が実施されますが、本年度下半期は「知られざる北の国境」シリーズとして、合計5回にわたるセミナーが総合博物館で行われる予定です。

10月5日には、佐伯 浩総長、各理事・副学長、外務省欧州局ロシア課事務官や文科省高等教育局大学振興課長、根室市長ほかのご出席の下で、本プログラムのオープニング・セレモニーが「知の交流」コーナーで開催され、引き続き2階展示室の見学が行われました。

松枝大治
(研究部教授/鉱物学・鉱床学)



グローバルCOE展示室



グローバルCOEオープニング・セレモニー



北海道大学 グローバルCOEプログラム
境界研究の拠点形成:スラブ・ユーラシアと世界

日本学術振興会外国人招へい研究者(長期)の紹介 ピョートル ヴェンジンビッチ Piotr Węgrzynowicz

ポーランド・ワルシャワ動物学博物館の准教授であるヴェンジンビッチ氏は、昆虫綱鞘翅目オオキノコムシ科の分類学研究を専門としています。2003年にも2年間北海道大学に日本学術振興会外国人特別研究員として滞在していました。今回は日本学術振興会外国人招へい研究者(長期)として、2009年4月から2010年2月までの10ヶ月間滞在の予定です。この間、北海道大学に収蔵されているオオキノコムシ科およびコメツキモドキ科、ナガシンクイ科などの甲虫類標本について、分類学的整理を

行い、それらの研究成果を論文発表する予定です。

ヴェンジンビッチ氏は、日本食好きで、納豆、塩辛は大好物。銭湯もお気に入りのようです。慣れた日本での生活をエンジョイしている様子はなかなか楽しそうです。最近札幌市の複雑なゴミ出しシステムの理解にも取り組み、日本適応度は上昇する一方です。

大原昌宏
(研究部准教授／昆虫学)



アイランド・アークのリニューアル



リニューアルされたアイランド・アーク展示室

平成21年8月末、総合博物館3階の通称「アイランド・アーク」展示室が一部リニューアルされました。1999(平成11)年の北大総合博物館設立当初、この展示室は第

Ⅰ期地球惑星科学分野モデル展示「アイランド・アーク ―島弧と海洋が出会うところ―」という名称で、本館最初の展示室として公開されたものです。本展示室は、文部省の総合博物館設立概算要求に向けたモデル展示室として、当時の大学院理学研究科地球惑星科学専攻の関係研究者により展示の構想と製作が進められ、説明パネルその他も自前で製作するという手作り感の溢れた展示室となりました。その後、2001(平成13)年10月の北大創基125周年記念事業として1階展示室がオープンされるまでは唯一の展示室であり、それまで総合博物館の顔として来館者の方々

に好評を博して来ました。

今回の展示リニューアルではより効果的な展示を目指して、それまでと全く不評であった展示物に対する照明法の改善に加え、説明パネル部分の一新を行いました。併せて、地元札幌市内で最近まで操業され国際的にも有名な豊羽鉱山コーナーを新設し、関係鉱石・鉱物標本や説明パネルなどを追加すると共に、動線を意識した展示物の再配置や恐竜模型の陳列棚の新規設置などを行いました。

これまでとはかなり趣が変わった、新しい「アイランド・アーク」展示室へ是非ご来室下さい。

松枝大治
(研究部教授／鉱物学・鉱床学)

HoUM「宇宙の4Dシアター」の活動

2009年度から本格的に展示公開・運営が進められている北大総合博物館・宇宙の4Dシアターの活動をお知らせします。「宇宙の4Dシアター」は、大きさや距離感・星の位置関係などを、地球を飛び立った宇宙船に乗っているような状態で見る事ができるシアターです。立体メガネをかけることによる飛び出す宇宙「3D」に加え、過去と未来の星空の状態を見ることが出来る

ことから「4Dシアター」と呼ばれており、2007年からカルチャーナイトなどでプログラムの公開をしてきました。

当シアターは現在月に1〜2度のプログラム公演を行っており、全て博物館ボランティアにより運営されています。ボランティアは市民と学生からなり、宇宙や気象を専門にしている方も、違う専攻の方もいますが、皆がそれぞれ得意なところを活かして参

加しています。公演プログラムももちろん彼らによる手作りのもので、日食やお月見など季節や宇宙に関連したイベントに合わせたもの、ケプラーの法則などの物理学をビジュアルで説明するもの、星座のかたちを宇宙に飛び出して「横から見る」ものなど、様々なものが制作されています。会場での宇宙船の操作、チラシやポスター制作、ホームページ更新もボランティアにより行われており、非常にアクティブなグループとなっています。9月には「花王・コミュニティミュージアム・プログラム2009」に

よる助成金対象に選ばれ、2010年度前期まで、北大キャンパスも含んだ展示などを行っています(当ニュース別稿)。

ボランティアは随時募集中です。希望者は小俣までご連絡ください。

y-komata@museum.hokudai.ac.jp

2009年度にこれまで行ったものは以下の通りです。今後も月に1~2度の公開を目処にプログラム上演を行い、最終的にはシアタールームの常時公開を目指しています。

・5月4日(月)・5日(火) 「天かける単身赴任」「ボイジャーが見た宇宙」

・6月6日(土)・21日(日) 「星空の立体感」「ボイジャーが見た宇宙」

・7月4日(土)・17日(金) 「星空の立体感」「天かける単身赴任」(両日公演)「日食〜太陽が消えるとみえてくるもの〜」(両

日公演)「惑星の軌道—まわる星たち」「ボイジャーが見た宇宙」

・8月1日(土) 「天かける単身赴任」「惑星の軌道—まわる星たち」



・9月23日(水) 「月たちの物語」「Aloha! ずばる(オート番組)」 「惑星の軌道—まわる星たち」



各プログラムの内容および今後の予定などは全てホームページに掲載されています。ご確認の上、飛び出す宇宙にぜひ足を踏み込んでください。

<http://museum-sv.museum.hokudai.ac.jp/activity/4dtheater/>

小俣友輝

(研究部助教/博物館情報科学)

HoUMオリジナルTシャツ デザインプロジェクト

総合博物館では、昨年度より北大教育GP「博物館を舞台とした体験型全人教育の推進」を実施しています。GPはGood Practiceの略、すなわち教育GPとは優れた教育の方法を提案・実施するもので、当プロジェクトでは北大の目指す「全人教育・



実学の重視」に適合した人材を養成することを目的としています。これまでも学生



が主体的に関わるプログラムを実施し、成果を上げています。北大教育GPについての詳細は以下でご覧になれます。

<http://museum-sv.museum.hokudai.ac.jp/projects/edu-gp08/gaiyo-main.html>

「HoUMオリジナルTシャツデザインプロジェクト」は教育GPの社会体験型科目の一つで、筆者と湯浅万紀子准教授が担当しました。美術家の安藤文絵さんの指導のもと、参加学生の一人一人が当館で心に響

いたものをTシャツのデザインに落とし込み、販売価格の交渉、広報のしかたや店頭のディスプレイまでを行いました。様々な学部から学生・院生8人が参加、そのうち4人のデザインを第一弾として販売開始し、これら

は8月中旬よりミュージアムショップに並んでいます。第二弾のデザインも提出され、店頭を飾る予定です。当プロジェクトは教育GPホームページ、札幌市の広報HPであるwebシティさっぽろで紹介されています。

http://museum-sv.museum.hokudai.ac.jp/projects/edu-gp08/project/project09_shirt.html

<http://web.city.sapporo.jp/info/0908/houm2.html>

また、北海道新聞、ローカルテレビ局のSTVとUHBからも取材を受け、学生のインタビューも紹介されました。大学にいな

がらにして社会とつながった体験ができるこのプログラムに参加した学生は、社会の厳しさを垣間見ることで苦しい一面もあっ

たが、よい経験になったと語っていました。その他の社会体験型科目は以下でご覧になれます。

http://museum-sv.museum.hokudai.ac.jp/projects/edu-gp08/kobo/kobo_home.html

小俣友輝

(研究部助教/博物館情報科学)

「Be Scientists!!～科学者になってみよう～」

理学院科学コミュニケーション講座・博物館研究室(教員:天野・湯浅・小俣)が開講した「博物館コミュニケーション特論」ではゼミ生が、中学生による標記の博物館体験学習を企画・実施しました。その目的は“科学者体験”を通じて、興味・知識を深め、知ることの楽しさを参加者が実感するところにあります。

参加した中学生たちはゼミ生たちの指



導の下で、グループ(古生物とほ乳類)に分かれて、熱心に標本を観察して仮説を設定し、様々な調査をおこなって標本の正体を解明してゆき、まとめた結果を公開の場で生き生きと報告しました。

参加者へのアンケートでは「覚える、実験するだけでなく、自分で徹底的に考えた」、「専門家へのインタビューや標本庫探査などふだんできないことを体験でき楽しかった」、「仲間と協力してまとめて行く苦労を体験できた」など、ゼミ生の企画目的をほぼ達成した内容が得られました。

【スタッフ】北海道大学大学院生(井口依子、石田祐也、関口郁恵、久井貴世、Tyrisevā Martina)

【協力者】教育大学附属中学教員・三浦英悟、北海道大学大学院生・北越美紀子、桜庭那々美、武田増満、総合博物館資料



部研究員・末永義圓、越前谷宏紀

【参加者】教育大学附属中学生・阿部永、入江葉子、加藤真樹、桑島純音、田村雪乃、矢田溪佑

【実施日程】2009年8月7日(金)～8日(土)
9:30～17:00

【実施会場】北海道大学総合博物館

天野哲也

(研究部長・教授/考古学)

「エルムの杜の宝もの」 ——道新ぶんぶんクラブとの共催講座を開催

総合博物館では今年度6月から10月まで毎月1回、北海道新聞ぶんぶんクラブと



の共催講座「エルムの杜の宝もの」を開催致しました。道新ぶんぶんクラブの会員を対象にした講座であり、当館を初めて訪れる参加者も多く、当館をより多くの方に知っていただく機会となりました。次のように博物館の標本や札幌農学校第2農場についての講義と見学を組み合わせたプログラムを実施し、ご好評をいただきました。第1回「北海道酪農の源流」(近藤誠司先生・中辻浩喜先生/家畜生産学)、第2回「北

大の植物標本の歴史」(高橋英樹先生/植物体系学)、第3回「岩石と鉱物が語りかけてくれるもの」(松枝大治先生/鉱物学・鉱床学)、第4回「ポプラチェンバロに親しむ」(小俣友輝先生/博物館情報科学)、第5回「エンマムシ研究と地球環境」(大原昌宏先生/昆虫学)。

ボランティアの展示解説グループと地学グループ、チェンバロ・グループにご協力いただき、運営致しました。

湯浅万紀子

(研究部准教授/博物館教育学)

2009年度 第1回ボランティア講座＆交流会

総合博物館では、約150名のボランティアの方々に標本整理や展示解説、図書室業務など13分野で活動していただいています。ボランティアに登録していただく際

には、ボランティア・マネジメント担当の筆者から大学博物館である当館の使命や成り立ち、活動展開、そしてボランティアの役割と位置付けについてご説明し、各分野



の担当教員の指導を受けて活動に従事していただいています。更に、2007年度より年2回、ボランティア活動の意義について確認の意味もこめたガイダンスと、博物館に関連した特定のテーマに関する講義、13分野のボランティアの意見交換から成る「ボランティア講座&交流会」を開催しています。

2009年度第1回は6月14日に開催し、南キャンパスを中心に巡りながら、当館の高橋英樹先生（植物体系学）に、キャンパスの植物や本学の植物学研究の系譜について解説していただきました。9グループから13名のボランティアが参加され、博物館だけでなく、このキャンパスの魅力を多くの方々に伝えていきたいと、高橋先生の

解説を熱心に伺いました。日ごろのグループの活動を紹介し合う交流会では、高橋先生から来冬のマキシモヴィッチの展覧会のご予定も伺い、和やかなひとときとなりました。

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

4Dシアターボランティアグループで 助成金獲得

2007年度より活動中のHoUM宇宙の4Dシアターボランティアグループでは、さらなる活動の発展のため、市民社会創造ファンド「花王・コミュニティミュージアム・プログラム」に応募し、見事助成団体に選定されました。花王・コミュニティミュージアム・プログラム詳細についてはホームページをご参照ください。

<http://www.civilfund.org/fund25.html>

「地域に根付いたミュージアムを拠点とした市民活動が活発化することを願う」この助成プログラムは「これらの活動を通じて、ミュージアムが活気に満ち、市民の活動が育つとともに、地域の文化が発展することを期待します。」と謳っています。

これは当館のミッション「展示公開、見学会、講演会、演奏会等を通じて、地域社会の人々、小中学生、高校生等の学習に貢献するとともに文化に触れる機会を提供する。」とも通ずるものがあります。4Dシアターの魅力を活かし、地域社会の全ての人々に対して、大学で行われている宇宙の研究活動や研究成果に関する情報提供を「効果的に」行っていく本ボランティアグループの活動は、今後もさまざまなかたちで活発化していきます。

花王・コミュニティミュージアム・プログラム助成を受け、ボランティアグループでは「北大太陽系」制作を行うこととしています。これは広い北大キャンパスを太陽系

に見立て、4Dシアタールーム＝太陽を中心に、HoUM内に水星・金星と地球を、また学内に火星・木星・土星・天王星・海王星を設置し、それらを巡るツアーや、北大太陽系に関連したシアターでの番組上演を行うものです。各太陽系惑星は、北大キャンパスを太陽系に見立てた場合の縮尺で制作されますので、太陽は直径30cm、地球は3mm程度になります。宇宙の広さと太陽系のスケール、それに比べて各惑星の小ささ、惑星と惑星の間に広い空間の広がる太陽系をキャンパスを歩きながら「体験」できる、新しいタイプの展示プロジェクトです。北大太陽系ガイドマップも制作予定です。マップ片手に構内散歩を楽しむ市民が増えることを期待しています。

小俣友輝
（研究部助教／博物館情報科学）

カルチャーナイト2009報告



ボプラチェンバロの紹介と演奏

7月17日、総合博物館はカルチャーナイト2009に参加し、「チェンバロと星空の夕べ」を開催致しました。展示を夜9時まで延長公開してスタッフが展示解説を行った他、当館ボランティアによるボプラチェンバロの紹介と演奏、4Dシアターでのオリジナル・プログラム「天かける単身赴任」、「日食～空から太陽が消えるとき～」、「惑星の軌道～まわる星たち」、「ボイジャーが見た宇宙」の上演を行いました。また、札幌星

仲間による観望会や、北大天文同好会と上富良野町一番星天文台の中西靖男氏による「富良野の夜空のLIVE中継」も行いました。体験型のプログラムが多く、様々な年代の来場者の方々からご好評をいただきました。

博物館ボランティア、北大学生、市民グループなど約70名の方々との協働によってオリジナルのプログラムを実現でき、総合博物館の可能性を示す取り組みとなりました。

湯浅万紀子
（研究部准教授／博物館教育学）

チェンバロアカデミーの活動

2004年に台風で倒れたポプラ並木の
倒木より制作されたポプラチェンバロは、
総合博物館チェンバロボランティアにより
管理・運営されています。毎週木曜日14時
～、および第二・第四水曜日の15時30分
～は「小さな演奏会」が彼らによって運営
されており、チェンバロが用いられた約

300年前の音楽を楽しめるのと同時に、希
望者には楽器に触れていただくことも可
能となっています。

また、ボランティアによるコンサートも企
画運営されており、博物館の由緒ある建物
の中で一般市民の方に楽しんでいただく
ことができます。今後の予定などは、ポスター



やWEBでご覧になれます。

<http://museum-sv.museum.hokudai.ac.jp/activity/cembalo/events/>

2009年度にこれまで行ったチェンバロ
を使った一般市民向けコンサートは以下
のとおりです。

・2009年6月21日(日)「イタリアンチェン
バロでいろんなバロック! vol.3」フレスコ
バルディ、モンテヴェルディ、バッハなど、
16世紀から17世紀の初期バロック期に
活躍した作曲家の作品を、声楽、チェンバロ、
リコーダー、フルート、バロック・バイオリン
などの器楽奏者らによって演奏。



・2009年6月28日(日)「リコーダーとポプ
ラチェンバロ 西洋音楽の年代記 1330—
1750」チューリッヒ芸術大学院在籍中の
遠藤麻衣子さん(チェンバロ)、チューリッ
ヒ高等音楽院在籍中のウンチョ・ユムさん
(リコーダー)を迎え、音楽大学で勉強中
の古典音楽の変遷、楽曲の背景、楽器の
変化などをスライドを使って解説しながら
演奏。

・2009年7月17日(金)「カルチャーナイト
2009 チェンバロと星空の夕べ」(別稿に
詳細あり)

また、9月16日(水)には「全国大学保健
管理研究集会」オープニングとレセプション
において、10月8日(木)には北大主催の
第54回パイプオルガン演奏会「オルガン、
チェンバロ、クラヴィコードの時代」におい
て使用されました。9月17日(木)には農
学校第一期生・大島正健の玄孫にあたるチェ

ンバリストの水永牧子さんを迎えてボランティ
アへの調律と演奏のレッスンをしていただ
き、ポプラチェンバロ制作時からの紆余曲
折話なども交えながらチェンバロ運用
についての知識と経験を深め、今後のボラ
ンティア活動の活力とさせていただきます。

北大には音楽を専門で学ぶ学部や学科
がなく、どちらかと言うと音楽の「聴いて
楽しむ」面が強く捉えられがちです。しか
し古典音楽には、音楽の背景に隠れてい
る作曲家の人格や当時のカルチャーを垣
間見たり、今の楽器との違いを知ることが
できる楽しみがあります。日頃行っている「小
さな演奏会」でも、演奏のみならずさらに
深いお話しが聞けるかも知れません。知
的で優雅な午後のひと時を博物館でお過
ごください。

小俣友輝

(研究部助教/博物館情報科学)

寄稿

博物館をオンラインでビジュアル化する

2009年はHoUMが開館して10周年と
なります。この間40以上の企画展示や多
くのゲストを迎えての公開イベントが行わ
れて来ており、これらのコンテンツをオン
ラインで公開するにはよいチャンスとな
っています。私はHoUMにおいて、様々な
マルチメディアコンテンツを制作するべく、
3月から6月まで札幌に滞在していました。

私はパブリック・エデュケーションの経
験を活かし、小俣助教とともにHoUMの展

示やイベントをオンラインに公開するこ
とを目的としました。最終的な目標として
は、ユーザがweb上の展示やイベントを見
聞きできることです。方法としては、初めに
写真をそのままアルバムにする、次にテキ
ストやレコーディングしたナレーションを
使って簡単なムービーとすることが挙げら
れます。ムービーは観賞用のボタンが一
つですが、アルバムは鑑賞者が自由に写真
を飛ばして観たりコピーすることができる

点で便利と言えるでしょう。さらに、それら
に用いる写真はパノラマに加工することが
可能です。展示室の模様やイベントを広い
視野で見せることにより、普通の写真に比
べて没入感がぐんと増します。

1999年のHoUM開館時以来、3つのメ
イン展示エリア(北大の歴史展示、学術テ
ーマ展示、学術資料展示)が構築されまし
たが、大学内、あるいは博物館内で新しい
知見が得られた時には展示はアップグレ
ードされます。それらは新しく構築された
マルチメディア・ホームページで見ること
ができると思います(注:年内公開に向け
調整中)。各展示エリアの紹介ビデオ(日



展示室のパノラマ写真

本語版、英語版)やパノラマ写真、クローズアップ写真がそこで見ることができます。

もう一つのコンテンツ発信方法としては、博物館スタッフに対するインタビューや、来館者に向けた短いコメントなどのオーディオ・データが挙げられます。私が収録した幾つかのコンテンツはオンライン化される予定です(注:考古学分野において、研究員の英語のインタビュー収録がなされています)。それにより、札幌市民はもちろん、世界中の人々がスタッフの生の声を聞くことができます。あるいはムービーによるものであれば、来館者のたどった道筋や関連イベントを思い出すよい手段となります。ムービーがインターネット配信には長過ぎる場合には、博物館内にムービーライブラリを設置し来館者に公開することによって、我々を取り巻く科学の世界に興味ある人々とコンテンツを共有できることになります。

私の母国語は英語ですので、ムービーやアルバムは英語で作られています。キャプションやナレーションは他の言語で置き換えることが可能です。例えば考古学を題材としたものであれば、ロシア語や中国語で置き換えることができれば効果的でしょうから、オホーツク文化のコーナーについては、そうした翻訳が行われるとよいと思っています。

HoUMでは、毎年幾つかの展示を行って

います。展示の雰囲気と幾つかの展示物についての詳細画像を残すため、私は小俣助教とともに、それぞれの企画展示をデジタル形式で残すデザインのテンプレートを制作しました。これが完成すれば、短いムービーや、テキストや写真を掲載したオンラインアルバム形式で展示の一部を見ることができるようになります。新しいマルチメディア・ホームページでは、コレクションや展示、博物館の教育プログラムなどを簡単に見て学習することができます。日本はもとより、多くの国の博物館がこのようなシステムを導入できればと思っています。

HoUM周辺には、札幌農学校第2農場(モデルバーン)や植物園などもあります。私はこれらの写真撮影とパノラマ制作を行い、テキストとともにムービーとオンラインアルバムを制作しました。ロケーションやコレクションについてのたくさんの情報を提示すれば、近隣の市民はもとより、世界中の人々が展示を「見る」ことができます。彼らはHoUM来館前に展示を臨場感とともに見ることができ、また来館後にも詳しく展示などを思い出すことができます。言い換えれば、オンラインコンテンツは本物を見ることにはもちろんありませんが、来館者に対し展示物などをさらに詳しく見ること、あるいはさらなる好奇心をかき立てることの手助けとなるのです。

HoUMデジタル化は総合的によい結果をもたらしました。ムービーやアルバムを使う人々からのコメントを取り入れることにより、サービスは向上します。一つの拡張性としては、例えばHoUMに所属する、ムービーやオーディオコンテンツ、アルバムを作りたいと思っている研究者を手助けすることです。6月下旬に行ったワークショップはこの集大成となっており、私と小俣助教はパノラマやムービー、オンラインアルバム制作の手法を提供しました。

サイエンスは世界共通言語であり、博物館はよりよいパブリック・エデュケーションを提供するために最善の方法を尽くす必要があります。インターネットは北大キャンパス周辺も含む世界中の学生や同僚とアイディアや問題を共有する最高の手段であり、一方で来館者に対して、博物館内の様々なコンテンツや館内で見ることが難しい情報(短いムービーや関連Webサイト、展示物と関連のある標本情報など)をオンラインで提供できます。ときには写真のみで十分な情報を提供することもできますが、ある場合には文字情報(キャプションやオーディオによる音声ガイド)が必要となります。あるいはナレーションもついた動画制作により、展示のすべての情報を提供する必要がある場合もあるかも知れません。

デジタルカメラはほとんどの人々が所



ワークショップの様子

有する手軽なツールであり、新しいものでは簡単なムービーも撮影できます。HoUMでの経験を通じて、私はもっと多くの研究者が写真やコメントなどを用いた作品を公開すべきだと感じました。それらに触れ、さらに深く理解したいと思った人々は、専門的な科学雑誌などを参考にしましょう。言い換えれば、短いマルチメディアのストーリーは、研究者やプロジェクト、あるいは展示の分かりやすい宣伝になるということです。それらはあるテーマについて全ての質問に答えられるものではないですが、見る側の興味のレベルを上げることができ、何より専門雑誌などよりも入手が簡単です。

現在は世界的にインターネットが普及し、既に日常に欠かせないものとなっています。

Web 2.0の世界では、発信する側だけでなく見る側もコメントや写真、質問などによりコンテンツ生成に参加できます。ゆえにHoUMの展示、最先端の研究、あるいは一般に向けたアクティビティなどをインターネットで閲覧可能にすべきと私は思います。それによりHoUMは、人々が日常的に参照したり、活動の場所を求めるインターネット上の様々な場所とつながることができます。今や誰にとっても、自分のコンテンツをオンライン化することが容易になって来ています。これは、これまでに増して多くのユーザが期待とともにあなたのWebサイト、あなたのコンテンツを探しに来ることを意味します。ですから、最初はオンライン公開用のフォトアルバムが簡単なムービーを制作してみましょう。次のス

テップは、ユーザが科学に関する情報を得るきっかけになるようなコレクション、あるいは研究プロジェクトの公開について考えることです。私のHoUMでの目的は、博物館の中にあるものを外のユーザに対して公開する方法を見付けることでした。さらには札幌の全ての博物館がこの例に倣ってくれるとよいと思っています。そうなれば、この地で催される展示会や新しい研究プロジェクトなどを皆が楽しみに思うようになるでしょう。

Guyen P.M.Witteveen
(特任准教授/2009年3月1日ー6月30日)

訳:小俣友輝
(研究部助教/博物館情報科学)

平成21年4月から平成21年9月までにおこなわれたセミナー

第217回 北大総合博物館土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座
「北海道開拓と北前船」
土屋周三(小樽市総合博物館・前館長)
日時:4月11日(土) 13:30ー15:00(参加者約120名)

第218回 北大総合博物館土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座
「モンゴルの現状ー伝統的な暮らしVS近代的な暮らし」
スフバートル レンチスレン
(北海道大学総合博物館・ボランティアHUISA)
日時:5月9日(土) 13:30ー15:00(参加者約90名)

第219回 北大総合博物館土曜市民セミナー
「支笏火山と支笏湖よもやまばなし」
若松幹男(北海道地質調査業協会 技術アドバイザー)
瀬戸静恵(財団法人自然公園財団支笏湖支部)
日時:5月16日(土) 13:30ー15:00(参加者約80名)

第220回 北大総合博物館土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座
「バッハの時代の音楽家たち
ー1700ー1750年の音楽模様 PART2」
明楽みゆき(チェンバロ奏者)
日時:6月13日(土) 13:30ー15:00(参加者約70名)

第221回 北大総合博物館土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座
「だれが標本を守るのか？」

ー研究でも教育でもない博物館の役割ー
持田 誠(総合博物館 研究支援推進員)
日時:7月11日(土) 13:30ー15:00(参加者約70名)

第222回 北大総合博物館土曜市民セミナー 第4回教育GPセミナー
「知られざる北海道写真の展覧会をつくる
ー北大総合博物館水産科学館の資料を利用した
学生の試み」

谷古宇尚(大学院文学研究科 准教授)
日時:7月25日(土) 13:30ー15:00(参加者約30名)

第223回 北大総合博物館土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座
「花の白露交流史ー幕末の箱館山を見た男
(2010年3月企画展プレセミナー)」

高橋英樹(総合博物館 教授)
日時:8月8日(土) 13:30ー15:00(参加者約90名)

第224回 北大総合博物館土曜市民セミナー 第5回教育GPセミナー
「フィンランドの教えない教育ー世界を創る対話の力ー」
池田文人
(大学院理学院/高等教育機能開発総合センター 准教授)
日時:8月29日(土) 13:30ー15:00(参加者約90名)

第225回 北大総合博物館土曜市民セミナー 道民カレッジ連携講座
「北海道のキノコ―森林におけるキノコの役割―」
五十嵐恒夫(北海道大学 名誉教授)
日時:9月12日(土) 13:30-15:00(参加者約80名)

第226回 北大総合博物館土曜市民セミナー 第6回教育GPセミナー
「流域主義による地域貢献と環境教育」
堂前雅史(和光大学 教授)
日時:9月26日(土) 13:30-15:00(参加者約40名)

平成21年5月から平成21年9月までにおこなわれた パラタクソノミスト養成講座

5月30日(土)
土器パラタクソノミスト養成講座(初級)
天野哲也・小野裕子(総合博物館)
定員:10名 対象:中学生以上・一般(参加者10名)

6月13日(土)
田んぼの植物多様性パラタクソノミスト養成講座(初級・中級)
岩淵成紀(NPO法人田んぼ)・島野智之(宮城教育大学)
定員:12名 対象:一般・農業従事者・教員など(参加者14名)

6月20日(土)～21日(日)
ハエ目昆虫パラタクソノミスト養成講座(中級)
館卓司(総合博物館)
定員:10名 対象:高校生以上・一般(参加者12名)

6月27日(土)～28日(日)
スゲ属植物パラタクソノミスト養成講座(中級)
勝山輝男(神奈川県立生命の星・地球博物館)
定員:10名 対象:中学生以上・一般(参加者12名)

7月4日(土)～5日(日)
植物パラタクソノミスト養成講座(初級)
加藤ゆき恵(大学院農学院)・高橋英樹(総合博物館)
定員:10名 対象:中学生以上・一般(参加者12名)

7月12日(日)
イネ科植物パラタクソノミスト養成講座(中級)
木場英久(桜美林大学)
定員:10名 対象:中学生以上・一般(参加者12名)

8月5日(水)～6日(木)
魚類パラタクソノミスト養成講座(初級)
河合俊郎(総合博物館)・矢部衛・今村央(大学院水産科学研究院)
定員:12名 対象:中学生以上・一般(参加者7名)

8月6日(木)～7日(金)
昆虫パラタクソノミスト養成講座in帯広(Jr.+初級)
伊藤彩子(帯広百年記念館)・大原昌宏・館卓司(総合博物館)
定員:12名 対象:小学校高学年以上・一般(参加者9名)

8月22日(土)～23日(日)
水草パラタクソノミスト養成講座(中級)
山崎真実(札幌市博物館活動センター)
定員:10名 対象:中学生以上・一般(参加者10名)

9月19日(土)
きのこパラタクソノミスト養成講座(初中級)
小林孝人(総合博物館)
定員:10名 対象:中学生以上・一般(参加者10名)

9月26日(土)～27日(日)
岩石鉱物パラタクソノミスト養成講座(初級)
在田一則(総合博物館)・三浦裕行(大学院理学研究院)
定員:12名 対象:小学生以上・一般(参加者23名)

平成21年4月から平成21年9月までの主な出来事

4月 20日	学振外国人招聘研究者(長期) Piotr Węgrzynowicz 氏着任 4/20-2/19	8月 1日	企画展示関連講演会「北大の分類学の系譜」
4月 28日	企画展示「支笏火山と私たちの暮らし」4/28-5/31	8月 1日	道新ぶんぶんクラブ教養講座(鉱物・鉱床学)
5月 14日	中国中央民族大学 陳理 学長御一行(6名)解説	8月 2日	オープンキャンパス 8/2-3
6月 2日	サテライト展示(千歳)6/2-30	8月 3日	サテライト展示(かでる)8/3-13
6月 6日	道新ぶんぶんクラブ教養講座(家畜生産学)	8月 6日	サテライト展示(帯広)8/6-9/15
6月 20日	エコキャンパス観察会	8月 7日	サイエンスアイ(ジュニアサイエンティスト育成プログラム) (20名)解説
7月 3日	ニュージーランド サウス・カンタベリー博物館長(2名)解説	8月 12日	ワリン・スチャラン タイ王国大使館学生部公使参事官御一 行(2名)解説
7月 4日	道新ぶんぶんクラブ教養講座(植物体系学)	8月 18日	サテライト展示(札幌)8/18-9/26
7月 11日	サテライト展示(旭川)7/11-9/23	8月 28日	企画展示関連講演会 「分類学の伝統を継承する若者たち」
7月 16日	中国河北省廃棄物処理研修 河北工業大学 張成徳 副教 授他(10名)解説	9月 1日	博物館実習 9/1-9
7月 17日	カルチャーナイト2009	9月 5日	道新ぶんぶんクラブ教養講座(博物館情報学)
7月 18日	サテライト展示(三笠)7/18-9/10	9月 6日	東京女子大学同窓会御一行(42名)解説
7月 18日	サテライト展示(中川)7/18-9/10	9月 9日	中国教育部行政官御一行(15名)解説
7月 23日	サテライト展示(札幌)7/23-9/13	9月 19日	サテライト展示(釧路)9/19-11/3
7月 28日	韓国全国理学部学部長御一行(8名)解説	9月 25日	企画展示関連行事「あなたが決める!!ベストポスター賞」 9/25-27
7月 30日	サテライト展示(小樽)7/30-11/3		
8月 1日	企画展示「生物多様な部屋―北大の分類学の系譜」 8/1-9/27		

入館者数(平成21年4月～平成21年9月)

	入館者数	見学 団体数	解説の 件数	企画展示(略称)
4月	3,399	5	2	支笏火山と私たちの暮らし
5月	5,748	16	9	支笏火山と私たちの暮らし
6月	8,054	41	8	
7月	5,713	25	12	
8月	11,320	16	7	生物多様な部屋
9月	8,452	29	10	生物多様な部屋

お知らせ

- 企画展示「正田豊治ガラス乾板写真展」が開催されています(2009年10月24日～11月23日)。
- サステナビリティ・ウィーク2009関連実験展示「統合科学が解明する『洞爺湖・有珠火山地域の過去と未来』」が開催されています(2009年11月4日～13日)。
- 企画展示「アンモナイト展」が開催されます(2010年2月16日～4月18日予定)。
- 企画展示「花の白露交流史」が開催されます(2010年3月14日～5月9日予定)。
- 特任教員として Alexander Ivanovich Lebedintsev 氏(考古(2009年11月1日～2010年1月31日))、Louis L. Jacobs 氏(古生物(2009年11月12日～2010年2月10日))、Grabovskaya Alisa Evgenievna 氏(植物学(2010年2月15日～2010年5月15日))が予定されています。
- 木山克彦氏(2009年11月、学術研究員)と宇佐見祥子氏(2009年10月、技術補助員)のお二人がGCOEにより採用されました。

お詫びと訂正

- 『北海道大学総合博物館ニュース 第19号』に以下の誤りがありました。お詫び申し上げます、訂正させていただきます。

5ページ「資料・展示の価値を引き出すこと」右段18行目
誤「OBの新山 惇氏」→ 正 「OBの新山 惇氏」

お 礼

以下の方々に、学術標本作製・企画展示準備等で協力いただきました。謹んでお礼申し上げます(平成21年4月～平成21年9月)。

植物標本:大原和広、桂田泰恵、金上由紀、黒田シヅ、甲山幸子、笹森明子、鈴木順子、須田 節、高橋美智子、徳原和子、与那覇モト子

菌類標本:笹森明子、鈴木順子、田中由香、三浦美恵子

昆虫標本:青山慎一、梅田邦子、大矢朗子、岸田耕一、喜多尾利枝子、久万田敏夫、永山 修、古田未央、宮 敏雄、宮本昌子、山本ひとみ、米田友祐

考古学系:木村麻衣子、比留間俊文

地 学:在田一則、荻田雄輔、岡田美佐子、生越昭裕、加藤典明、神村泰

恵、甲山幸子、堀 俊樹、佐藤和子、嶋野月江、塚田則生、寺西辰郎、鳥本准司、野邊果愛、福地伸章、宮 敏雄、山崎敏晴、安田 正、山本ひとみ、渡辺隆司

情 報:石上隆達

化 石:相原大介、荒木真野子、石田祐也、石橋七朗、江越 春、大塚勇太郎、岡田美佐子、尾上洋子、川原早紀子、菊地香織、呉谷 文、清水良平、鈴木順子、田中嘉寛、千葉謙太郎、寺西辰郎、冨野淳子、中野 系、安田 正、八巻千晶、渡辺隆司

北大の歴史展示:寺西辰郎

展示解説:在田一則、石川満寿夫、石田祐也、石橋七朗、井上拓己、河本恵子、北越美紀子、國松 淳、児玉 諭、齋藤美智子、桜庭那々美、田中嘉寛、千葉健太郎、寺西辰郎、中野 系、西川笙子、沼崎麻子、沼田勇美、林 昭次、村井容子

平成遠友夜学校:安東志麻、安藤亮太、石田多香子、大野円実、久保拓士、齋藤美智子、竹内ひかる、田中敏夫、沼田勇美、原 祐、見山智宣、村井容子、横田麦穂

図 書:柏谷美也子、菅 妙子、齋藤美智子、塚田則生、西川笙子、沼田勇美、久末進一、鮎田久意、星野フサ、八木田道敏

4Dシアター:石倉未奈、井上拓己、荻田雄輔、久保拓士、呉谷 文、小松麻美、佐藤祐介、長水しのぶ、柳田拓人、若山真梨子

チェンバロアカデミー:石川恵子、大矢朗子、北川高之、久住千佳子、香田亜衣、小坂佳子、小西智子、佐藤浩輔、佐藤万記子、清水聡子、高橋友子、土橋頼子、新妻美紀、福士江里、水永牧子、村上英樹

HUISA:呉 明熙

生物多様な部屋:在田一則、虻川修士、石田多香子、石田祐也、石宮愛美、市川千帆、越前谷宏紀、大矢朗子、角井敬知、柏谷美也子、菅妙子、菊地香織、甲山幸子、児玉歩美、齋藤美智子、齋藤佑里子、桜庭那々美、佐藤大輔、嶋田大輔、平 理沙、多田泰弘、千葉謙太郎、塚田則生、寺西辰郎、永山 修、新妻美紀、沼田勇美、幡宮聡美、林 昭次、蛭田眞平、広瀬雅人、鮎田久意、星野フサ、水田裕希、道林千晶、村田紗織、村松弘規、森菜摘子、山崎博史、山本ひとみ、山本侑奈、吉原大貴

(敬称略)

北海道大学総合博物館ニュース 第20号

北海道大学総合博物館ニュース

編集:天野哲也・星野祐子

発行日:2009年(平成21年)11月

発行者:馬渡駿介

発行所:北海道大学総合博物館

住所:060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

電話:011-706-2658・FAX:011-706-4029

E-mail:museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp

http://www.museum.hokudai.ac.jp/

印刷:柏楊印刷株式会社